

この度、‘わんりい’25年に亘る活動が「日中学院・倉石賞」に選ばれました。「倉石賞」とは、日中国交が再開された1972年より21年前の1951年に日中学院の前身である「倉石中国語講習会」を創設し、中国語の教育に取り組んだ倉石武四郎先生の「日中友好の懸け橋になろう!」との思いを生かし、1989年4月、日中学院創立38周年、倉石先生没後15周年を記念して設けられました。以来、当会の受賞まで19団体が表彰されています。

昨年9月末、日中学院副学院長である鈴木繁先生より「倉石賞候補の団体を求めている。その募集要項を‘わんりい’に掲載して欲しい」との連絡を頂きました。「倉石賞」については、‘わんりい’の活動に関して相談をし、指導も頂いて来た三山陵先生(首都大学東京非常勤講師)が事務局長を務める「日中藝術研究会」が、1996年第8回倉石賞を受賞しておりましたのでその存在は知っておりました。鈴木先生からの依頼に、「倉石賞」がまだ続いていたことに驚き、‘わんりい’周辺の団体をいくつか思い浮かべてみたりもしました。が、‘わんりい’の活動がその対象になると思っていなかったこともあり、いつかすっかり忘れてしまっていました。

ところが、元日中学院講師であり、現在‘わんりい’の会員にもなって下さっている花岡風子さんより、11月上旬、「‘わんりい’を倉石賞候補に推薦したいので、これまでの活動の資料を貸して頂けますか」との申し出を頂きました。「推薦くださるなんて嬉しいわ。でも倉石賞のような立派な賞の対象にはならないと思うけど…」などと言っておりました。が、それから1ヶ月も経たない12月の半ば、「田井さん、‘わんりい’の受賞決まりました」との連絡で、え、まさか!ありえない!!と我が耳を疑いました。

‘わんりい’会則には「中国の文化、芸術の鑑賞、研究を通じて、真の中国を理解し、併せて、日中両国人その他、国籍や民族を問わず、自然で自由な人間的交歓と交流を実現し、維持する事を目的とする」と尤もらしい目的が書かれてありますが、会の実際の活動は、会名に「市民サークル」が付くように私たち、普通の市民であるおじさん・おばさん達(ゴメンナサイ)が、中国と、その先にある国々の文化に対する興味と好奇心をエネルギーにして面白がり楽しんで活動して来ているというのが本当の姿です。ですから、倉石氏の「日中友好の懸け橋とならん」という心には程遠いところで活動していたと思います。しかし、振り返ってみますと、中国の皆様との温かな交流で培ってきた相互のゆるぎない信頼感こそ両国の懸け橋なのかもしれません。

‘わんりい’の活動歴は、会のHPでご覧いただくとして、25年間、‘わんりい’の活動に関わってきたものとして、これまでの活動を支え、育ててくれたと思われる3つを選んで述べてみます。

## 1) ‘わんりい’メンバー達は好奇心旺盛

1992年、中国雲南の少数民族の「織と染め」に触発されて中国語の勉強を思い立ち、4回の中国語体験講座の呼び掛けをし、体験講座後、20名で中国語勉強会が始まりました。1990年代の初め、中国語に関心を持って講座に集まった皆さんは、実は、日本的な「普通の市民」ではなく、好奇心旺盛であり開放的で、ボランティア精神溢れる人たちでした。すぐに意気投合し、教室内だけの交流では飽き足らず、「先生の悪口をいう会」として先生を呼ばずに、月1度の会食をするようになりました。「先生の悪口をいう」と言いながら、実は、講師を受けて下さった、中国国家京劇院・武生役である京劇俳優の張紹成さんが大好きで、この会食の中で、先生の演ずる京劇を見たいと京劇鑑賞会を企画し、その後、京劇鑑賞講座や中国民族音楽音楽会、京劇界の名優として知られた王金璐先生を招聘するなど、次々企画を立てて行きました。その後、中国語講座と同時に始まった「気功と太極拳の講座」、活動を通して生まれた「京劇を楽しむ講座」の世話人が加わり、会の活動について連絡・相談する定例会と変わりました。定例会に参加される方達の出入りはありましたが、今も月1回、当初と変わらぬ心意気ある者達が活動についての基本的な相談をしています。

## 2) ‘わんりい’に関わった中国の皆さん達

当初の「わんりい中国語勉強会」講師・張紹成さんは、まだ20代後半の美青年でした。中国語の講師は初めてだったそうで、質問に答えられず頬を染める姿が初々しく、4、50代のおじさんやおばさんである中国語講座メンバーのハートをしっかりとつかんだことが、‘わんりい’が始動する切っ掛けになりました。先生の京劇を見たいと開催した京劇は、京劇の花形・武生役の優雅で華やかな立ち回りあり、人情の機微に触れるコミカルな恋愛劇あり、まっ暗闇の中のスリリングな活劇ありでたちまち人々を魅了しました。

‘わんりい’が幸運だったことは活動開始とほぼ同時に、このような活動を通して、自分の将来を日本に託して来日した、高学歴で、自国の文化を背負った多数の、若く、魅力的な若者たちと知り合ったことかと思えます。会のメンバー達はこれらの若者たちと接することで、文革の影響もあって日本にあまり伝わらなかった生の中国の文化に触れ、純粋に感動しました。自分の居場所を求めていた中国の若い皆さん達も私たちの感動に答えて快く協力くださり、共に同じスタンスのボランティア精神で活動を支えてくださり、活動外でも人間同士としての交流が今も続いています。

### 3)行政の協力

1990年代の初めは、当時急速に増えた来日外国人の皆さんに対して、行政がまだはっきりした施策を打ち出せないでいた時代だったと思います。町田市の場合、国際交流協会のような組織はなく、国際交流基金という、国際交流活動への助成金が用意されていました。活動内容の審査や決算報告に向けられる目は厳しいものでしたが、公からの助成は有難く、また、助成を頂くことで活動の姿勢を正し、各方面から信頼を頂ける会に育ったとも言えると思います。

活動はその後軌道に乗り、町田市に隣接する川崎市へ広がって行きました。川崎市市民文化室からは、恐らく室長さんの人柄もあったと思いますが、会の活動企画を持ち込む度、市庁舎内の記者クラブで記者会見を開いて下さったり、拙い手作りのチラシを市内全域に配布する手続きをして下さるなど温かく実質的な支援を頂きました。いまでも頭が下がる思いでいます。馬頭琴演奏では第一人者と言われるチ・ボラグ氏の故郷の小学校再建を目的にした演奏会、在日中国民族音楽演奏者を総動員しての演奏会他、1000席を超える市民館大ホールでの催しは満席になる盛況ぶりでした。

改めて推薦下さった花岡さん、‘わんりい’のこれまでの活動を評価下さった選考委員の諸先生、そして‘わんりい’に関わった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、身の丈に合った「草の根」的な活動ながら、個々の皆様の好奇心を原動力に、活動を通して広い世界に目を向けて行けるとよいと思っています。